

〈研究・調査報告〉

サイレント映画と活弁に見る映画の基礎教養

竹 藤 佳 世

【要旨】

この研究では、西洋からの輸入品である「映画」と日本の「話芸」の融合である「活弁」の歴史と現在を研究することで、日本の映像文化の独自性を明らかにすることを目指す。

具体的には、映画評論家・白井佳夫氏（元キネマ旬報編集長）と佐々木亜希子氏（活弁士）による「映画基礎教養講座」等での活弁と講演の記録を始め、国内外の取材・調査を行い、サイレント映画の発展期にどのようにして映画の表現技法が発達したのかを研究する。

キーワード：映画、話芸、教育

1. はじめに

今日の社会において映像メディアは、スマートフォンやSNSなどの普及に伴って、多くの人にとって身近なコミュニケーションツールとなりつつある。かつては専門的なスキルを持つ人だけが可能だった映像制作も、一般の人々が日常的に行うことが可能になっている。また、コロナ禍により、オンラインミーティングや、ライブ・イベントの配信なども急速に普及し、映像から情報を得ることは、凶らずも全世界的に推進されることとなった。

しかし反面、それが芸術表現としての映像文化にどんな影響を与えているかも、検討されるべきだろう。制作される（あるいは自動的に生成される）映像の数は増えても、その多くは固定カメラで、音声を中心とした「情報」を流すためのツールであり、そこに映像ならではの表現の工夫、意図は不要とされる場合も多い。

そうした映像は、もちろん現代の社会に必要なものであり、重要な情報源にもなっているのではあるが、アートとしての映像表現のレベルは果たして上がっているのか、という疑問もある。「とりあえずスマホを据えて、そこで何かしゃべってればいい」と言った、ある意味安易な発想に流れがちなのが現状である。

しかしこれは、歴史を振り返れば、映像文化が発展する上でかつて通った道でもある。1895年、パリで上映された『ラ・シオタ駅への列車の到着』『工場の出口』といった最初の映画は、それこそ固定のカメラの前に列車が到着する様子や、工場の出口から出てくる人々を映し出す「実況」的な映像だったが、当時はmovivng picture、「画が動く」だけでも驚きの対象だったの

である。サイレント、白黒といった今よりも少ない情報量の映像に対して、クリエイターたちがさまざまな工夫から、カメラワークやモンタージュといった技法を編み出し、音がないのに音を感じさせる、色がないのに色を感じさせる、高度な映像表現が生まれていったのである。

そうした映像の歴史を振り返った時、固定カメラの映像から、新たな映像表現への飛翔のヒントがサイレント映画に秘められているのではないかという推論が成り立つ。さまざまな映像が混沌と行き交う現代だからこそ、基礎となる部分を若い世代に引き継ぐ仕事が必要なのではないかと思われる。

2. サイレント映画と活弁

サイレント映画に弁士が語りをつける「活弁」は、日本独特の文化である。明治時代に輸入されてきた「映画」は、撮影や映写といった技術な面で未知なものであっただけでなく、そこに写される風俗、習慣なども当時の日本人にとって理解不能なものが多々あったと思われる。それを弁士たちがそれぞれに独自の解釈でエンターテイメントにしたものが、「活弁」である。他国では生演奏だけだったのが、日本の映画館では活弁と楽士の生演奏が付いていた。

「わからない」こと、理解を越えたものを忌避したり、恐れたりするのではなく、わからないなりに面白がろう、という旺盛な野次馬精神は、海外からの異文化を受容し、独自に発展させてきた日本の文化のあり方を映し出しているのではないかと思われる。

一時期は8,000人いたとも言われる活弁士だが、映画のトーキー化によりその数は減少していった。しかし、令和の現代においても、バリアフリー上映や、海外との交流など「活弁」が、世代や国を越えた映像コミュニケーションを可能にしている事例も見られる。

3. 現代の活弁・先行研究

近年では、活弁士を主人公とした映画「カツベン！」（周防正行監督、2019）などで脚光を浴びた活弁であるが、先行研究として科学研究費の対象となった事例では、「大正期における日本映画の形成過程に関する複合的要因の研究」（早稲田大学特別研究員 上田学、2013-2016）でのボン大学での「活弁」のSPレコードの調査、「田中栄三資料のカタログングによる新派映画の基盤的研究」（神戸学院大学 上田学、2020-2023）などでの音源を中心とした研究がある。

また東京外国語大学大学院国際日本学研究院主催の連続講演会「国際日本学がめざすもの：その多面性と可能性」2018年9月14日（金）では大森恭子氏（ハミルトン大学）の「サウンド・オブ・サイレンツ―無声映画と弁士の語り」が取り上げられている。

早稲田大学では、2019年にロサンゼルスのカリフォルニア大学ロサンゼルス校Billy Wilder Theaterを会場に、UCLAと早稲田大学スーパーグローバル大学創成支援事業国際日本学拠点との共催で、映画上映会「The Art of the Benshi」および国際シンポジウム「Talking Silents:

New Approaches to Early Japanese Cinema and the Art of the Benshi」を開催している。さらに2024年には、早稲田大学とUCLAとの共同連携事業である「柳井イニシアティブ」により、全米4都市（ニューヨーク、ワシントンD.C.、シカゴ、ロサンゼルス）と早稲田大学にて「The Art of the Benshi 2024 World Tour」を開催するなど、積極的な取り組みを行なっている。

4. 「映画基礎教養講座」の概要

今回の研究で取り上げる、映画評論家・白井佳夫氏（元キネマ旬報編集長）と佐々木亜希子氏（活弁士）による「映画基礎教養講座」は、東京・高円寺シアターバックスで、2022年から始まった活弁上映とトークを発展させたものである。

当初、2022年は隔月の開催だったが、2023年からはほぼ毎月となり、2024年は「活弁ライブ」という形で継続し、同年9月まで白井氏の解説映像と、回によっては白井氏自身も上演後のアフタートークに参加する形で開催された。

現在活弁で使用されるサイレント映画は、ビデオ化された時に音楽がつけられているものもあるが、この講座では音楽もキーボードを中心とした楽器により、生で劇伴が付けられる形で上演された。楽士に経験豊富なミュージシャンである永田雅代氏を迎え、白井氏と佐々木氏のセレクトによる見ておくべきサイレント映画の名作・秀作に、即興演奏と活弁をつけ、楽しみながら映画の基本を学ぶことができるという趣向である。更に佐々木氏と白井氏とのアフタートークでは、映画のみならず、出演者、時代背景などについて、白井氏ならではの知見やエピソードが引き出されるなど、充実した講座内容であった。

また、活弁上演前に流される10分ほどの「解説映像」の存在も作品への理解を深める上で効果的であった。これによって、サイレント映画にそれほど親しみがない観客も基本的な知識を得て、映画に入りやすくすることができた。

この映像は、事前に白井氏の書斎で佐々木氏をインタビュアーとして収録され、シアターバックスの丸山大悟氏による撮影・編集により制作された。白井氏ならではの古典映画の豊富



図1 高円寺シアターバックス「映画基礎教養講座」でのトークと解説映像

出典：竹藤佳世

な知識の一端を知ることができるものであると同時に、白井氏の蔵書の凄まじい量や、仕事場の様子を伺い知ることができる貴重な映像である。

5. 出演者について

「映画基礎教養講座」の企画者であり、出演者でもある白井佳夫氏（1932年-2024年）は映画雑誌「キネマ旬報」編集長をつとめた後、フリーの映画評論家に転身し、東京12チャンネル（現・テレビ東京）で「日本映画名作劇場」の解説者などで一般にも親しまれた評論家である。「対談集 銀幕の大スタアたちの微笑」「日本映画のほんとうの面白さをご存知ですか？」など多くの書籍の著者であり、湯布院映画祭、徳島テレビ祭の創設にかかわるなど、日本の映画文化の発展に寄与してきた人物として、文化庁映画賞（映画功労部門）を受賞している。アカデミックな活動としては、東京藝術大学「映像・舞台芸術実験授業」にて2002年より3年間、「日本の古典映画－黒白映像黄金分割画面の日本映画の研究」を担当している。

一方、弁士の佐々木亜希子氏は、埼玉大学教養学部卒業後、NHK山形放送局でキャスターを務めた後フリーになり、女性活動弁士・澤登翠の門下生として2001年より「活動写真弁士」として活躍している活弁士である。舞台、ナレーション、音声ガイド、司会、講演、脚本、執筆など、その活動は多岐に渡り、全国の映画祭を始め、東京国立近代美術館フィルムセンター等、日本を代表するフィルムアーカイブに出演している。その活動は著書『カツベンっておもしろい! 現代に生きるエンターテインメント「活弁」』（2019年）に詳しい。

また佐々木氏は、北区文化教室『弁士教室』始め、こどもや大人の活弁ワークショップでの講師も務め、活弁の魅力を広める活動も行っている。更に活弁の技術を活かし、視覚障害者も楽しめる映画音声ガイドに携わり、2010年バリアフリー映画推進団体「特定非営利活動法人Bmap」を立ち上げ理事長を務めている。視覚障害者のための音声ガイドや聴覚障害者のための日本語字幕制作、「ユニバーサル映画祭」などを展開するなど、現代における活弁の活用を実践している。

こうした、現代に活躍する活弁士と、90歳を越える評論家との貴重なコラボレーションが、活弁による「映画基礎教養講座」なのである。

ちなみに、二人の接点が前述の東京藝術大学「映像・舞台芸術実験授業」の「日本の古典映画」の講師と受講生という関係だったことから、佐々木氏は白井氏を「先生」と呼んでいる。

6. 取り上げられた映画

この講座及びそれに連なるイベントで取り上げられた映画は以下の通りである。

特に表記がない場合、弁士は佐々木亜希子氏、楽士は永田雅代氏である。佐々木氏以外の活弁士が担当した場合や、「声色かけあい活弁」（数人の活弁士が声優のように役を分け、セリフ

をあてる活弁スタイル) の場合はその旨を表記する。

【2022年】 バッカス活弁サロン 映画基礎教養講座 (隔月)

4月30日(土)～5月2日(月) Vol.1 フランス文学サイレント映画原作デュマ親子対決!

『ダグラスの三銃士』(1921年) 声色掛け合い

『椿姫』(1921年)

6月23日(木)～24日(金) Vol.2 映画の父D・W・グリフィスの大作!

『イントレランス』(1916年)

8月19日(金)～20日(土) Vol.3 阪東妻三郎渾身の剣戟映画!

『雄呂血』(1925年)

『弥次喜多 岡崎の猫騒動』(1937年) 声色掛け合い

10月18日(火)～19日(水) Vol.4 三大喜劇王

『チャップリンの消防夫』(1916年)

『海底王キートン』(1924年)

『ロイドの浮気者』(1917年) 砂川和子

12月23日(金)～24日(土) Vol.5 未来都市を描いた空想科学映画の傑作

『メトロポリス』(1926年)

12月30日(金) Vol.6 天才エルンスト・ルビッチ映画祭

『ウィンダムミア夫人の扇』(1925年)

『結婚哲学』(1924年)

【2023年】 毎月開催

1月26日(木)～27日(金) Vol.7 ニコニコ大会 “コメディの系譜”

『強敵』A Strong Revenge (1913年)

『要心無用』Safety Last! (1923年)

2月24日(金)～25(土) Vol.8 巨匠溝口健二監督サイレント期の最高傑作

「瀧の白糸」(1933年)

3月17日（金）～18日（土） Vol.9 表現主義・シュールレアリズム
『カリガリ博士』（1919年）
『アンダルシアの犬』（1929年） 広居バン

4月28日（金）～29日（土） Vol.10 元祖恐竜アドベンチャー
『ロスト・ワールド』（1925年）
『月世界旅行』（1902年）

5月22日（月）～23日（火） Vol.11 ロシア映画史上の最高傑作
『戦艦ポチョムキン』（1925年）

6月16日（金）～17日（土） Vol.12 マキノ映画全盛時代
『浪人街（第一話）（第二話）』『崇禅寺馬場』（1928, 29年）

7月24日（月）～25日（火） Vol.13
喜劇の王様齋藤寅次郎×日本初の女性脚本家水島あやめ
『明け行く空』（1929年）
『モダン怪談 100,000,000円』（1929年） 藤本剛

8月21日（月）～22日（火） Vol.14 古典怪奇ロマン
『吸血鬼ノスフェラトゥ』（1922年）
『アッシャー家の末裔』（1928年） おさべせりな

9月22日（金）～23日（土） Vol.15 生誕120年没後60年記念小津安二郎監督
『東京の合唱（コーラス）』（1931年）

10月27日（金）～28日（土） Vol.16 若き日のヒッチコック、サイレント時代の代表作
『下宿人』（1927年）

11月23日（木）～24日（金） Vol.17 生誕120年チャンバラスタア 片岡千恵蔵と嵐寛寿郎
『番場の忠太郎 暎の母』（1931年）
『鞍馬天狗 恐怖時代』（1928年） 広居バン

12月16日（土）～17日（日） Vol.18 豪華スペクタクルの巨匠セシル・B・デミルの代表作
『十誠』（1923年）

【2024年】「活弁シネマライブ」として開催

1月15日（月）～16日（火） Vol.1 不朽の名作×怪奇俳優ロン・チェイニー
『オペラの怪人』（1925年）

2月23日（金）～24日（土） Vol.2 不朽の名作×怪奇俳優ロン・チェイニー
『ノートルダムのせむし男』（1924年）

3月14日（木）～15日（金） Vol.3 世界が手に汗握った“活動写真“超大作！
『つばさ』（1927年）

4月26日（金）～27日（土） Vol.4
ダグラス・フェアバンクス大活躍！ファンタジーアドベンチャー
『バグダッドの盗賊』（1924年）

5月23日（木）～24日（金） Vol.5 巨匠フリッツ・ラングの100年前の大作
『ニーベルンゲン』① 『ジークフリート』（1924年）

6月27日（木）～28日（金） Vol.6 巨匠フリッツ・ラングの100年前の大作
『ニーベルンゲン』② 『クリームヒルトの復讐』（1924年）

7月21日（日）～22日（月） Vol.7 夏のラブコメ2本立て！
『ロイドの何番々々』（1920年） 広居バン
『荒武者キートン』（1923年）

8月休演

9月6日（金）～7日（土） Vol.8 巨匠F・W・ムルナウの傑作
『サンライズ』（1927年） 白井氏アフタートーク最終出演

10月11日（金）～12日（土） Vol.9 古代神話と現代科学～異形のロマンチズム
『巨人ゴーレム』（1920年）
『フランケンシュタイン』（1910年） 藤本剛

※白井氏解説映像最終出演（逝去前に収録した映像）

白井氏の急逝により、以降は白井氏の出演はないが、2024年12月までの上演作品のセレクトには、生前の氏の意向が反映されている。

11月1日（金）～2日（土） Vol.10 第一回アカデミー賞監督賞・脚本賞・主演女優賞
『第七天国』（1927年）

12月12日（木）～13日（金） Vol.11
日本のサイレント末期大衆娯楽映画 斎藤寅次郎喜劇と大都映画
『子宝騒動』（1935年）
『争闘阿修羅街』（1938年）

7. 映像教育の観点から

上記のリストからも、映画の登場した19世紀末から1930年代の、いわゆるサイレント映画の時代は、初期の固定カメラの素朴な映像から、さまざまなカメラワークやアングルなどの撮影技法が生まれ、映像の基礎文法が確立されていった過程を伺い知ることができる。

『イントレランス』に代表されるようなハリウッドの大作では、「イントレ」という言葉の語源になった移動式の足場で広大なセットを組み、クレーンなどでの大規模な撮影が行われるようになった。また編集技法でも「戦艦ポチョムキン」の有名なモンタージュなど、高度な映像表現が生み出された。

後期になると、ディゾルブや合成など、現在のVFXにつながる効果などもつけられるようになり、単純に目の前の出来事を写しただけでなく、過去の回想や、未来のイメージなど、時系列を複雑にし、登場人物の内面をも映像化するような表現が生みだされた。F・W・ムルナウ『サンライズ』などは、そうした映像技法をふんだんに使い、言葉によらず、イメージの連想で映像を繋いでいくために、サイレント映画で試せる表現を使い尽くすような贅沢な作りになっている。カメラのフレーム、役者のアクションはもちろん、ハリウッドに田舎と都会のセットを作って撮影するなど、全てにこだわり、聞こえない音をも聞かせようとする意気込みが伝わってくる。

また、ジャンルの的にも、コメディ、恋愛、アクションと言った、サイレントでも伝わりやすいジャンルから始まり、歴史、SF、サスペンス、ホラー、アニメなど、ほぼ今日あるジャンルが生まれてきているのも、この時代である。

『ロスト・ワールド』は、ストップモーションなど特殊撮影を駆使して制作された映画であるが、コマ撮りの特撮パートのアニメーションの見事さはもちろん、実写パートの人間ドラマとのマッチングも優れており、当時の撮影機材やフィルムで、こうした現代でも容易に真似できない技法を長編で確立していることは驚嘆すべきことである。

ある意味、トーキーに移行する上での物理的な制約（音の同録のために、カメラの駆動音を抑えるブリンプが必要になるなど、機材面での変化があった）以前の、ビジュアルを中心にした映像作りは、このサイレント時代を頂点としていると言っても過言ではない。「映像で語る」ことを学ぶ上での格好の教材であることは言うまでもない。

最も歴史の長い映画賞である「アカデミー賞」は1929年に開始したが、映画は誕生から30年余りの間に「見せ物」から、表彰すべき「アート」に進化したということもできるのではないだろうか。サイレント映画によって、その進化の過程を追うことができるメディアなのである。

8. 時代の記録の観点から

映画作品は制作者の思惑を越えて、時代を映し出す鏡である。サイレント映画に映し出される映像にもまた、アール・デコ、ドイツ表現主義、ダダイズム、ロシア・アヴァンギャルドなどの芸術運動が、美術セットや衣装小物、街中の風景などに反映されている。

特に白井氏が解説やトークの中で熱く語っていたのは、「ドイツ表現主義」についてである。その圧倒的な力を持つ「未来」のイメージで『スター・ウォーズ』はじめ後のSF映画に多大な影響を与えた、フリッツ・ラング監督『メトロポリス』は、前衛的なビジュアル表現だけでなく、労働者と資本家の争いなど、階級闘争の時代の思想をも写し出している。

美術運動が映画に与えた影響は大きく、『カリガリ博士』のゆがんだ美術セットは、あたかも「ドイツ表現主義」絵画の中で物語が進行しているような印象を与えるし、ルイス・ブニュエルとサルバドル・ダリという時代を代表するアーティストが制作した『アンダルシアの犬』の不条理劇は「シュールレアリズム」など、その時代の芸術が映画に与えた影響が顕著である。

それではサイレント映画の時代とは、どのような時代だったのか？近代オリンピックや万博の開催、ライト兄弟の初飛行、摩天楼の出現やモータリゼーションの発展など「現代」の始まりの時代であり、いわば「現代」の基礎が築かれた時代といえるだろう。

それは列強による植民地支配から第一次世界大戦、ロシア革命、世界大恐慌を経て第二次世界大戦に向かう激動の時代であり、ヨーロッパからアメリカへ世界の覇権が移行する時代でもあった。フランスで生まれた映画が、アメリカ・ハリウッドで発展し、アメリカが映画大国になったのも、そうしたことの一端とも言える。

日本では日露戦争、大正デモクラシー、関東大震災、昭和恐慌を経て軍国主義に傾倒していく時代である。

パレスチナとイスラエル、ロシアとウクライナなど、現在の紛争、戦争、人種差別などの種はこの時代に蒔かれている。

こうした時代をも、映画は映し出した。有色人種やユダヤ人などは、しばしばコメディ映画の中の笑いの対象になったり、ドイツ人が好むチーズが強烈に「臭い」、といった差別的な表

現はサイレント映画ではしばしば見られる。

『サンライズ』での男女のステレオタイプな描き方（男が間違いを犯すのは浮気相手の「悪女」のせいであり、それらを全て許すのが「聖女」のような妻）など、映画は良くも悪くも時代の「気分」を写しとる、記録としての機能も有しているのである。今日では許されない表現が含まれていることも含め、サイレント映画は時代を記録しているのである。

9. まとめと今後の課題

こうした近現代の縮図とも言えるサイレント映画だが、音声付きの映像に慣れた現代の感覚では、サイレントのまま、中には2時間近い大作を視聴するのは、相当な関心がない限り難しい。そこで「活弁」が持つ、いわば翻訳力が必要になるのである。単純に、ライブで目の前で人が喋る、ということに人は関心を持つということもあるが、佐々木氏の活弁の特徴として、登場人物のセリフを当てるだけではなく、当時では持てなかった視点からの解説を入れるという点が特徴的である。

例えば、制作当時使われていた撮影の技法や、撮影の裏側のエピソードなどの解説、あるいは出演者がどんな俳優か、その後どんな映画で活躍したか、など当時の知識がない視聴者でも、内容を理解したり、関心を持てる話題を活弁の中に盛り込んでいるのである。

また、サイレント映画の中には、しばしば激しく損傷したり、欠落した部分があることにより、文脈が不明になっている場合もある。そのまま見ただけでは意味がわからない映像を、弁士の語りで補足することで視聴に耐えるものにするということも、現代の活弁士の大きな役割ではないかと思われる。

佐々木氏の活弁は、単に台詞のアテレコとしてだけでなく、100年後の今だからこそ見出せるさまざまな情報を含んでおり、映像だけでなく活弁と共に上演することの意義を深めることのできるものである。

かつて異文化である「映画」を日本に根付かせた「活弁」は日本独自の映像文化として現代にも生きている。そして過去の娯楽というだけでなく、現代では過去と現在を結ぶ翻訳者としての役割をも担う可能性があるのではないだろうか。

幸い、「映画基礎教養講座」「活弁ライブ」のうち、2022年末からの活弁や白井氏と佐々木氏のトークは、映像での記録を筆者が行っている。この映像とテキストでのまとめを行い一般に公開できる形にし、サイレント映画・活弁を映像教育に役立てていくことが、今後の課題である。

10. おわりに：謝辞

最後に研究に協力していただいた佐々木亜希子氏、白井佳夫氏、白井真木氏、内藤和之氏、

シアターバックス丸山大悟氏、株式会社ワイ・プランニング山添時彦氏始め関係者に感謝申し上げます。

また、この講座の企画者であり、出演者であった白井佳夫氏は、2024年10月5日に享年92歳で急逝されました。東京藝術大学「映像・舞台芸術実験授業」の「日本の古典映画—黒白映像黄金分割画面の日本映画の研究」で2年間教えを受け、20年の時を経て「映画基礎教養講座」で再び白井先生の教えを受けたことは、筆者の大きな財産となりました。感謝申し上げると共に、ご冥福をお祈りいたします。

【参考文献】

佐々木亜希子（2019）『カツベンっておもしろい！現代に生きるエンターテインメント「活弁」』論創社 248p

淀川長治（1977）『映画はやっぱりスターから—ハリウッド女優1920年代』Jパブリッシング 232p
一般社団法人 日本映像ソフト協会 Q&A

https://www.jva-net.or.jp/faq/qa_21.html

柴田康太郎（2023）『日本のサイレント映画を「再現」上映する』
表象文化論学会 研究ノート

<https://www.repre.org/repre/vol47/note/shibata/>

公益社団法人著作権情報センター CRIC

<https://www.cric.or.jp/qa/hajime/hajime3.html>

早稲田文化 The Art of the Benshi 2024 World Tour 早稲田大学公演

<https://www.waseda.jp/culture/news/2024/02/21/24064/>

Fundamental Film Education Through Silent Films and Katsuben

Kayo Takefuji

Abstract

This study aims to clarify the uniqueness of Japanese visual culture by researching the history and present of katsuben and silent films.

Specifically, research and analysis of lectures by film critic Yoshio Shirai (former editor-in-chief of Kinema Junpo) and Akiko Sasaki (katsubenshi) at “Fundamental film education” and other events. From this study, I will make out that how film expression techniques developed during the age of silent film.

Keywords: Film, Storytelling, Education